

## 献 辞

昭和五八年（一九八三年）以来、四半世紀以上にわたって成城大学で日本史学の教育・研究に当たってこられた吉原健一郎先生が、本平成二二年（二〇〇九年）三月末日をもって成城大学を定年退職された。吉原先生の退職に当たり、成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻並びに文芸学部文化史学科とともに学び・研究をしてきた者の論考を集めた論集が、このたび刊行する『日本常民文化研究―吉原健一郎教授退任記念号』である。

大学院文学研究科日本常民文化専攻主任として本記念号のまとめ役を仰せつかったとは言え、成城大学に着任して一〇年にも満たず、吉原先生がご専門とする日本史学にも疎い私（上杉）が、この「献辞」の中で、吉原先生の研究・教育業績や人柄を過不足なく紹介することは望むべくもない。そこで、数年間身近に接したごく私的な観点から吉原先生を紹介することで、私の「献辞」に代えさせていただきます。

吉原先生は東京教育大学並びに大学院で日本史学を学ばれた後、二〇年近くにわたり静岡県清水市や東京都公文書館で資料編纂や研究に当たられていた。その間、埃に埋もれた古文書と格闘する日々が続き、それが原因で若くして肺気腫を患われたと聞いている。「肺気腫というのはね、上杉さん、昔は、埃だらけの文献資料を相手にする歴史学者がもらう勲章みたいなものだったんだよ」と、何の

気負いもなくおっしゃる吉原先生に、「この人は本当に歴史学が好きなんだな」と思ったことが思い出される。肺気腫を患うほどに資料を読み込んだ成果は、東京都公文書館時代の終わりには、『江戸の情報屋』(一九七八)や『江戸の町役人』(一九八〇)等として刊行され、吉原先生は江戸の庶民文化を独自の視点から捉える「吉原史学」を打ち立てられた。

その後、昭和五八年(一九八三年)に成城大学に移られ、本年(二〇〇九年)まで、二六年の長きにわたり、文芸学部文化史学科並びに大学院文学研究科日本常民文化専攻において教育・研究に携わってこられた。成城大学へ着任直後から、『江戸学事典』(一九八四)や『江戸東京事典』(一九八七)を編集されるなど、以前にもまして精力的に教育・研究に取り組んでこられた。吉原先生の研究意欲は衰えを知らず、江戸の落書や銭相場など、次々と新しい研究分野を開拓されてきた。近年も、『江戸の銭と庶民の暮らし』(二〇〇三)を刊行されるなど、私ども同僚教員のみならず、学部学生や大学院生たちに対しても常に刺激を与え続けて下さった。

教育においては、吉原先生は成城大学着任当初の四〇歳代半ばから「大人の風格」を醸し出し、面倒見の良さも相俟って吉原ゼミはつねに「満員御礼状態」であった。見るからに「やんちゃ」とおぼしき学生たちが吉原先生にいたく懐いていたのは、ひとえに、時としてやさしく、時として厳しい先生の「人徳」によるものであろう。

吉原先生は大学運営においても数多くの重責を全うされた。成城大学着任後しばらくして就任した

文芸学部文化史学科主任を皮切りに、その後、大学院日本常民文化専攻主任、学生部長、民俗学研究所長、大学院文学研究科長などを歴任された。また、その間、成城学園の評議員も長らく務められ、大学のみならず、幼稚園や小・中・高校等の運営にも携わってこられた。

なお、吉原健一郎先生の成城大学における教育・研究・運営等に関する長年の貢献に対して、平成二十一年（二〇〇九年）四月一日付で「成城大学名誉教授」の称号が贈られたことを申し添えておきたい。

さて、最後に、成城大学文化史学科並びに大学院文学研究科の入学式や卒業式・学位授与式など各種の行事、儀式において恒例となっていた吉原先生直伝の「一本締め」にて私の拙い「献辞」を締めくくることとしたい。

以下は、私が成城大学に着任して以来幾度となく聞いてきた、吉原先生の関東一本締めの前口上を再現したものである（大筋は間違っていないはずです）。

皆さんは手締めというものをご存知でしょう。

シャシャシャン、シャシャシャン、シャシャシャン、シャン！ という手打ちのことです。

で、皆さんが良く知っている手締めは、この手打ちを三回ほど繰り返します。これは三本締めと言われます。私が今日皆さんに披露するのは、この三本締めではありません。関東一本締めと



史化並びに大学院文学研究科日本常民文化専攻に受け継がれてきた関東一本締めで、この「猷辞」を締めくくることとする。

吉原健一郎先生の成城大学ご退職に際し、吉原先生のご健康と今後ますますのご活躍を祈念し、

一、それでは、皆さん、

お手を拝借！

二、イヨーオ！

シャシャシャ、シャシャシャ、シャシャシャ、シャ、シャ、シャ！

三、ありがとうございます。

パチパチパチ…（拍手）

平成二十二年（二〇〇九）年六月

上杉富之